
かわいそうに...

saika

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かわいそうに…

【Nコード】

N5916K

【作者名】

saika

【あらすじ】

かわいそうに…。

わたしの血縁者が殺されてしまった。

かわいそうに…。

わたしの血筋の者に、関わってはいけなかったのに…。

「えっ…？ うそっ…」

それは一本の電話から始まりました。

まだ夕飯を食べている時、電話が鳴り、出たのはわたしの母でした。

母は電話の内容を聞き、真っ青な顔色でわたし達を見ました。

そして…

「殺された…殺されてしまった…」

壊れたテープレコーダーのように母は繰り返しました。

「どっとうしたの？ お母さん！」

わたしは母に駆け寄り、その肩を掴みました。

「あのコがっ…殺されてしまった！」

―母が次に言葉を紡いだ声の意味は、わたしの血縁者の女の子の名前でした。

「うそっ…！？」

その場にいた父に兄、そして弟も言葉をなくしました。

そしてわたしも。

血縁者達が、女の子の家に集まりました。

一戸建ての家はまだ新しく、住人が亡くなると言うのはまだ早過ぎる気がします。

「どうなるんだろうねえ」

「どうなるって、そりゃあ…」

「やめろよ。今言うことじゃないだろ？」

十数人の血縁者達は、複雑な表情でボソボソと話し合っています。

女の子の両親は今、警察の人に呼ばれていません。

母が部屋に入って来た時、一気に静かになりました。

すでに黒い着物に身を包んだ母は、険しい表情で血縁者達の顔を見回しました。

「…警察の方から、事情は聞きました」

そして重い語りが始まりました。

女の子はまだ高校2年の17歳でした。

優しく温かなコで、性格は可愛かったけれど、見掛けは美人という、ちょっと変わった女の子だったんです。

でも…そんな女の子だから、多くの人に、強く好かれもしました。
女の子には1年前からストーカーがいました。

何でも女の子が前に、そのストーカーがケガしているのを手当てしたことから、不幸が始まったようです。

ストーカーは女の子が女神に見えたんでしょう。

そうしてほぼ毎日、何かしら女の子に好意を見せるも、ストーカー扱いされ、逆上し、女の子を殺してしまったんです。

「幸いにもその青年はすぐに警察に捕まったそうですけど…」

「どこが幸いだよ」

兄が重々しい口調で、母の言葉を遮りました。

「犯人は女の子を『殺した』んだろ？　ただで済むワケねーだろ」

「兄さん！」

あんまりな言葉に、わたしは兄の腕を引っ張りました。

しかし兄は強い目で、わたしをにらみ返します。

「…こっちだって、被害者だっ！」

忌々しそうに呟く兄は、腕を振り解き、そっぽを向いてしまいました

た。

「…とりあえず、お葬式は明日にでもすぐ行います。マスコミなどは警察の方が抑えてくれるそうですから、みなさんもくれぐれも…」

「分かっているよ」

「身内のことだからな」

血縁者達は心得たように頷き合います。

そして翌日。

小雨が降る中、近所のお寺でお葬式は始まりました。

女の子のご両親は泣きながら、訪問者達に頭を下げます。

わたしも親族席に座りながら、女の子の遺影を見つめます。

明るく、わたしにも懐いていた可愛いコです。

いなくなったことが…今でも信じられません。

…ストーカーのことは、何となく感じていました。

けれど警察の人がいるし、学校のみんなもいるから、と明るく振る舞っていました。

その本心を、見抜けなかった自分が情けないです。

女の子は殺される時、どんなに怖かったでしょう？

どんなにさびしかったでしょう？

最期に何を思い描き、何を感じたのか…もう聞く手段はありません。

…やがて人氣が途絶えた時、数人の人がまとまってきました。

しかし雰囲気がおかしく、わたしは隣の母の顔を窺いました。

「…犯人と、刑事さん達、そして犯人のご家族よ」

犯人と思しき青年は、見た目は普通の青年でした。

少し大人しめの…人殺しだとは思えないぐらいの青年です。

けれどその顔は平然としていました。

自分が犯した罪を、アレは理解していない顔です。

「このたびは本当につ…！」

大きな声に視線を向けると、女の子のご両親に、青年のご両親が土下座をしていました。

けれど2人は顔をそむけ、何にも言えずにいました。

「本当に、すみませんでした」

付き添っていた3人の刑事さん達も、悲しみの表情で頭を下げます。

けれどももう…遅いのです。

女の子はすでに殺されてしまったんです。

もう…遅いのです。

全てが。

犯人のご両親は、わたしの母と兄が顔を上げさせました。

そして次々とご焼香をするのに、犯人は何もしません。

ただ遺影の前に立ち―笑いました。

会場内がざわめく中、犯人はお父様に殴られ、吹っ飛びました。

けれど笑みは絶やしません。

警察の人に掴まれ、無理やり寺から追い出されるような形になってもまだ、笑顔でした。

…わたしの中で、怒りが沸き起こりました。

すでに済んでしまったこととは言え、せめてっ！

せめて、後悔してほしかった！

なのにアイツはっ！

わたしは母の言いつけを守らず、お寺から飛び出しました。

そして車に連れ込もうとされている犯人の腕を掴み、こっちを向かせました。

「―何？」

犯人はふてぶてしそうな態度をしました。

―ならもう、抑えることは無いでしょう。

「…一つ、言いたいことがあります」

「何だよ？ 恨み言？」

「いえ、済んでしまったことを言うつもりはありません。ただ、これから起こりうることについて」

「おっお嬢さん」

警察の方や、犯人のご両親の前で、わたしは犯人を指さし、こう言いました。

「あなた、もうすぐ死にます。それも『殺してくれ』と言わんばかりの苦痛を以て」

犯人の目が、大きく見開かれました。

「おいっ！」

兄の声で、わたしは我に返りました。

「…では、よき旅路を」

犯人に頭を下げ、わたしは、戻りました。

…そして数日後。

再び家に電話が鳴り響きました。

その電話を取ったのは、兄でした。

電話の内容を聞いた兄は、険しい表情で家族に告げました。

「―女の子を殺した犯人、死んだ。実家に戻ってきた時、火事が起きて、1人逃げ遅れたんだって」

「ああ、やっぱり…」

弟がぼそつと呟いた言葉は、家族全員の心の声でした。

「うちの血縁者に関わってはいけなかったのにね」

「…しかも殺しなんて恐ろしい真似をすれば」

「地獄を生きたまま、味わうことになるのね」

弟の言葉に続き、父や母も力なき声で応えました。

そつ…不思議ではないことなのです。

犯人が酷い目に合いながら死ぬことを、わたし達、血縁者達は全員分かっていたことですから。

ちよつと昔の話になります。

わたし達、血縁者のご先祖は力の強い、呪術師だったんです。

しかし時代と共に、廃業になりました。

そこまでは良かったんでしょう。…時代的にも。

しかし呪術師は己の血にまで、その術と力をかけていました。

…ゆえに我らの血縁者は、強く人を惹き付けるのです。

そして酷い目に合わせたり、殺したりなんてするものならば…生き
たまま、地獄を味わうのです。

わたし達血縁者は、そんなふうに出獄を味わう人々を、この目に焼き付け、生き続けなければならないのです。

だって、誰にも解決法を知らないんですから。

そうまるで、『呪い』のように—。

ああ、そう考えると、わたし達血縁者達も、

『かわいそう』…なんですネ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5916k/>

かわいそうに...

2010年10月20日19時40分発行